

不安と抽象

— T. E. Hulme の位置 —

Vanity of vanities, saith the Preacher,
vanity of vanities; all is vanity.
—Ecclesiastes I, 2



Le silence éternel de ces espaces infinis
m'effraie. —Pascal (Brunschvicg 206)

両角克夫

近代から現代を区別する最も特徴的な気分の一つは不安である。不安とは *chaos* と虚無に浮ぶ心情であり、自己疎外と孤独の感覚でもある。

The Renaissance 以来の近代ヨーロッパに於て人間の限界と生の不安を問題にした思想家や作家がなかつたわけではない。17世紀に於ける Pascal, 19世紀に於ける Kierkegaard, Baudelaire, などがそれである。然し彼等が真に問題とされるようになったのは20世紀になつてからであり、彼等の真価は現代に於て初めてあらわにされたと云えよう。

生の不安は, *fin de siècle* に於ける近代ヨーロッパの社会的思想的根本矛盾の上に表面化し, その危機的性格は第一次第二次大戦によつて更に深められて来た。

現代に生きる人間は, あらゆる生活の分野に於て, 自己が投げ込まれている社会的心理的不安に否応なしに面接し, これに対して何らかの態度の決定を迫られる。このような状況を素通りしてしまう思想や文芸は現代の不安と *nihilism* とを克服することは不可能であり, 従つて現代に於ける存在の意義を喪失するであろう。

T. E. Hulme の現代英文学史上に於ける位置は, 彼が近代精神の根本矛盾を如何に分析しこれを現代に於て如何に克服せんと試みたかを明白にすることによつて定められるであろう。以下 Hulme の主著《*Speculations*》にあらわれた芸術哲学の背景と構造を解明し, その現代的意味を問うて見たい。



Hulme の芸術観は, 彼の世界観, 人間観の上に立っている。Hulme はまず19世紀にいたるまでの根本的な思考方法が *continuity* であるとし, この *continuity* の考えを破り *discontinuity* の考えをもつて前者に代える。

“One of the main achievements of the nineteenth century was the elaboration and universal application of the principle of *continuity*. The destruction of this conception is, on the contrary, an urgent necessity of the present.”(p.3)

Hulme は世界を恐らく Pascal の三つの秩序 (la chair, l'esprit, la charité) にならつて、無機的、有機的、神的の同心円としての三領域に区分し、これらの領域の不連続性を強調する。18世紀の機械的唯物論が、有機界を無機界によつて説明せんとして誤謬を犯したと同様に、これに抗して起つた19世紀に於ける Nietzsche, Dilthey, Bergson 等の生哲学と呼ばれるものは、有機界と神的倫理的世界との混同に陥つたのであり、Hulme の当面の仕事は、人間的なものと神的にして永遠なるものとの不連続を明かにすることであつた。

従つて Hulme にとつて人間は無常な不安定の存在として規定される。

“Man returns to dust”.

“Man is the chaos highly organized, but liable to revert to chaos at any moment. Happiness and ecstasy at present unstable.” (p.227)

これはキリスト教の dogma であり、人間観であるところの “the Fall of Man” にもとづくものであるが、人間の空しさと生の不安が、現代人の悲劇の実感として Hulme に於てあらわになつたものに他ならぬ。彼の美学もこれに基づく。即ち人間が有限存在でそれをめぐる reality が flux であり cinders であると実感すればする程、人間は芸術に於ては、solid, eternal, durable なものに reality を定着し、抽象せんとする。不安定な現象としての自然は、克服されるべき素材としての与件であり、美は reality の再現ではなくして、抽象である。かかる立場から、Hulme はロマン主義又は humanism と彼の所謂古典主義の基本的態度を区別する。

“We may define Romantics, then, as all who do not believe in the Fall of Man”. (p.256)

“.....One can define the classical quite clearly as the exact opposite to this. Man is an extraordinarily fixed and limited animal whose nature is absolutely constant.” (p.116)

然し Hulme は歴史に於ける種の変動を飛躍的突然変異に於て認めようとする。De Vries の mutation theory を Hulme は自己の支えとする。

“.....that each new species comes into existence, not gradually by the accumulation of small steps, but suddenly in a jump, a kind of sport, and that once in existence it remains fixed. This enables me to keep the classical view with an appearance of scientific backing.” (p.117)

又Hulme に於ける人間は、その original sin と cindery chaos から脱し得るか。可能性があるとすれば如何にしてか。

“ That man is in no sense perfect, but a wretched creature, who can yet apprehend perfection.” (p.71)

“It is only by tradition and organization that anything decent can be got out

of him”. (p. 116)

“……man can …… only accomplish anything of value by disciplines……”

(p. 256)

人間は自身不完全でありながらも、完全なものを知り得るところに、彼の存在の二重性があり、彼の惨めさと偉大さの内的矛盾の生む悲劇がある。

又自由主義的楽天主義に抗し impersonal なものとして discipline, tradition, organization, を Hulme は強調するのであるが、それらによつて人間が救われるとするならば、そこには Hulme の排する humanism の残映、即ち人間の傲慢さが残つてはいないか。何故と云つて、discipline も tradition も organization も人間的努力と経験の集積であり、それは有機的な中間的領域を出るものではないからである。この点 Hulme は、humanism 批判を更に徹底させるべきであつたと思う。従つて彼の religious attitude と呼ぶものは、純福音的のものとは、かなりの距離を有するであろう。



Hulme は芸術の様式を geometrical と vital の二つに分け、夫々異なる世界観と精神的要求に応ずるものとする。

彼は Worringer の美学を援用しながら、vital art を Greek and modern art since the Renaissance とし、anti-vital 即ち geometrical art を Egyptian, Indian, Byzantine art とする。

ヘブライの芸術にふれないのは、イスラエル人が何ら芸術作品と呼ばれるようなものを残していないからである。

Hulme は vital art の内容を説明する。

“The source of the pleasure felt by the spectator before the products of art of this kind is a feeling of increased vitality, a process which German writers on aesthetics call empathy (Einfühlung).” (p. 84)

又 anti-vital art の内容を説明して、“It most obviously exhibits no delight in nature and no striving after vitality. Its forms are always what can be described as stiff and lifeless. ……This is what Worringer calls the *tendency to abstraction*.” (p. 85)

と述べ、この anti-vital art を生む心理は separation の感情であり、Worringer の所謂 ‘space-shyness’ とし、更に論を進め、

“In art this state of mind results in a desire to create a certain abstract geometrical space, which, being durable and permanent shall be refuge from the flux and impermanence of outside nature……” (p. 86)

“In the endeavour to get away from the flux of existence, there is an

endeavour to create in contrast an absolutely enclosed material individuality
 ……In monumental art, the abstract and inorganic is always used to make the
 organic seem durable and eternal.” (p.90)

これは自己満足のアートではなくして、自己不安のアートである。現代アートの中にかかる傾向を強く感じた Hulme は、その先駆者を P. Cézanne に於て認める。

“ …… fundamentally Cézanne differed from his contemporaries, the impressionists. It was against fluidity that he reacted. He wanted, so he said, to make of impressionism something solid and durable like old art.” (p.100)

感覚によつて外光の中に豊かな色彩を見出した印象派の人々は、同時に変幻極まりない流動の中に「物」の solid な形が埋れてしまう危険を感じたことであろう。感覚によつて古典に帰ろうとした Cézanne の仕事は、確かに自然の再現にあきたらずして、永遠の秩序を求めていつた厳粛な態度を感じさせるものであり、そこには tendency to abstraction を観ることが出来る。外界の再現と模写、感情移入や自然発生的で安価な詠歎主義、これらのものに対する不満こそ現代アートの中核をなすものであろう。従つて、geometrical かどうかは別として、現代アートは不安の生み出したものであり、外界からの乖離と不調和の実感を出発点としている。Hulme はこれを正確に感じとつていた。唯 Hulme は現代のアートを取扱う場合、Cézanne から Picasso, Braque を通じて形成されて来た cubism, geometrical art のみを観て、André Breton や Dali を中心に展開して来た surrealism に於ける non-geometrical abstract art への傾向を見落している。

Hulme は現代アートに於ける機械の影響が単に機械の模写ではなく、現代人の感覚と態度の本質に結びつくものであると説明する。

“ The point I want to emphasize is that the use of mechanical lines in the new art is in no sense merely a reflection of mechanical environment. It is a result of a change of sensibility which is, I think, the result of a change of attitude which will become increasingly obvious”. (p.109)

そして Hulme は現代アートの感覚性を、dry, hard, solid, definite, accurate 等の言葉で表現している。これらは、あらゆる意味でロマン主義的感覚とは対照的なものであり、無機的な表現形式にかかわるものである。

次に Hulme は Bergson に関する二論文 “Bergson’s Theory of Art”, “Intensive Manifolds” に於て Bergson に対するかなりの共感を示している。Bergson の哲学は経験主義を更に深めた流動と音楽的リズムの哲学であり、印象主義、象徴主義の哲学とも云われる。かかる哲学に Hulme が関心をもつたのは、彼自身英国本来の empiricism の上に立ちながら、印象主義から後期印象主義又は立体主義への過渡的時代に生きた批評家として、充分理由のあることであつた。然し Bergson の哲学は本質的に vital である。従つて Hulme はそこに不満をもつた筈である。“…too much founded on analysis and experience of modern art—particularly symbolism” と云つているが又、“ his psychological results enable him to describe the indescribable

process of artistic creation” と云い、又 “No philosopher ever attached such importance to it (art)” (pp. 263—4)とも云っている。

然し Hulme が imagist に近い詩を作り、表現に於ける印象の freshness を重んじ、そのために metaphor の重要性を考え、必然的に reality とその言語表現に関する困難な問題に直面した時、Bergson の哲学が如何ばかり大きな光を投げたことであろう。Bergson に於ける reality とは、flux であり、intensive manifolds と呼ばれ又 interpenetrated reality と呼ばれるものである。これは分析的な intellect で捉えることは出来ない。直観によらなくてはならぬ。しかもその reality は我々の日常的な功利性を目的とする action によつて、覆われている。この功利的な日常性を破り、reality に我々を面接せしめるものが芸術である。言葉も日常的な用語に於て reality を伝えることは出来ない。metaphors や symbols が要求される。更に Bergson は、我々には二つの自我即ち superficial self と fundamental self とがあり、superficial self が fundamental self を覆っていると云う。この superficial selfこそ墮落せる日常人であり、fundamental self が他ならぬ本来の自己、即ち実存である。Hulme は言語表現と reality との問題を次の如く述べている。

“The motive power behind any art is a certain freshness of experience which breeds dissatisfaction with conventional ways of expression”.

“Creation of imagery is needed to force language to convey over this freshness of impression”. (p. 163)

Hulme は imagery を重んずる。それは換言すれば、視覚的象徴とも云えよう。唯 Poe から Mallarmé に流れて来た indefinite な音楽的象徴に対して、Hulme の imagery は definite な造形的象徴を意味する。いずれにせよ、imagery は、reality を具体的に正確に表現するものでなくてはならぬ。歓念や感情による言語の用法からは imagery は得られない。これが impressionism や imagism の主張であつた。

impression の認識に於ける重要性は、英国経験論の中で主要な位置を占める David Hume に於て既に取上げられた。impression が fresh である故に、概念よりもより直接的に生々しいものとされた。英国経験論の伝統の中にあつて、Bergson によつて更にそれを深め内面化することを学び得た Hulme は、romanticism の一変形たるドイツ観念論的主情主義の美学に代る新しい芸術哲学の建設に向つていた。しかし Hulme は Bergson の flux としての reality の形象化のみには満足出来ず、更に永続的にして、堅固なるもの、建築的で monumental なものにまでの抽象化を求めた。沙漠であり cinders であり chaos である現実を限定し秩序づけることによつてこれを克服せんとする芸術行為の解明こそが彼の芸術論の中心であつた。

“Why is it that London looks pretty by night? Because for the general cindery chaos there is substituted a simple ordered arrangement of a finite number of lights.” (p. 221)

彼の芸術哲学は Bergsonism から多くのものを得ながらも、激しい生の不安の上に立つている。現代に於ける、生の不安は Hulme に於ては original sin の dogma と

結びつき、又 Worringer の抽象芸術の解釈に共感を見出し、Cézanne に於て、cubism に於て、その実例を見出すことが出来た。

“ Truths don't exist before we invent them.” (p.240)

“ There is no end at all except in our own construction.” (p.243)

ここには Poe 以来ますます意識的になつて来た作家の制作活動の内面が露わにされている。近代の芸術行為が意識的にならざるを得なくなつたのは、外界からの切断と疎外から来る孤独感と不安によるものであり、そこには苦々しい pessimism を見ることが出来よう。意識的とは critical と云うことでもある。それは危機の意識につながる。この辺の消息について、T. S. Eliot が “The Use of Poetry and the Use of Criticism” の中で、“The Modern Mind” に関する章の冒頭、J. Maritain の次の言葉を引用している。“Work such as Picasso's shows a fearful progress in self-consciousness.” (Art and Scholasticism)

Hulme は芸術に於ける美や秩序はどこまでも人間によつて cindery chaos の中から抽象して作られるものと考えながら、人間によつて作られたものの有限性を忘れなかつた。彼は “infinite” なる言葉の従来 of 学者達による使用法を批判している。人間は有限であり、永遠の中に同化することによつて ecstasy を得ることは出来ない。人間の行為は、結局に於て、永遠者の前には空しいことを Hulme は強く実感していた。

“ Man is an extraordinarily fixed and limited animal whose nature is absolutely constant”. “Man is always man and never a god”.

そして、かかる人間の限界を忘れた bad metaphysical aesthetics の例としてドイツ美学を説明する。

“ Particularly in Germany, the land where theories of aesthetics were first created, the romantic aesthetes collated all beauty to an impression of the infinite involved in the identification of our being in absolute spirit. In the least element of beauty we have a total intuition of the whole world. Every artist is a kind of pantheist”. (p. 131)

これに対する neo-classism の自覚的態度ともいうべきものについて Hulme は説明している。

“ I can now get at that positive fundamental quality of verse which constitutes excellence, which has nothing to do with infinity, with mystery or with emotions …… I prophesy that a period of dry, hard, classical verse is coming”. (p.134)

そして Hulme は Coleridge 以後問題になつて来た imagination と fancy とを取上げ、新しき古典主義の武器は fancy であることを主張する。

“……where you get this quality exhibited in the realm of the emotions you get imagination, and that where you get this quality exhibited in the contemplation of finite things you get fancy”. (p.134)

又 fancy と metaphor と image との関係をのべそれらが正確な表現を得るための

ものであることを説明する。

“Fancy is not mere decoration added on to plain speech. Plain speech (i. e. conventional language) is essentially inaccurate. It is only by new metaphors, that is, by fancy, that it can be made precise”. (p.137)

“Images in verse are not mere decoration, but the very essence of an intuitive language”. (p.135)

ここにはやはり Bergsonism の影響を見ることが出来よう。又 Hulme に於て、詩の価値を決定するものは、その題材よりはむしろ、どの程度自己の体験と感動を realized visual object として適確に捉え得たか、そこに real zest があるかどうかである。Hulme にとっては、あらゆる主題は芸術のための素材に過ぎない。表現の厳密さこそ問題である。然しこれは安易なる意味に於ける形式主義、芸術至上主義と見なすべきではあるまい。偉大なる芸術家にとつて、あらゆる人生体験は等しく素材としての価値を有するものであり、流れ去つて行く多様な体験をば、しばしせき止め、限定し、永続的で客観的な「物」の姿にとどめようとする努力は、現実の不安の中に生きる人間の永遠へのささやかな思いを示すものであるから。然し、人間によつて作られた秩序は、所詮、部分的、有限的なものである。

“What I mean by classical in verse, then, is this. That even in the most imaginative flights there is always a holding back, a reservation. The classical poet never forgets this finiteness, this limit of man. He remembers always that he is mixed up with earth. He may jump, but he always returns back; he never flies away into the circumbient gas”. (p.120)

“It is essential to prove that beauty may be in small dry things.

The great aim is accurate, precise and definite description”. (p.132)

以上に於て、Hulme の所謂 neo-classicismなるものの本質が明白にされるであろう。かかる厳しい芸術の方法は、Joyce や T. S. Eliot の中に、又 Valéry の中にヨーロッパ精神の伝統の意識と結びついて存在したのである。



Hulme は1917年9月27日、Nieport で戦死した。それ以後、近代ヨーロッパはその終末的な危機の様相を更に深めて来た。それは科学的技術の急速の発達に比して、人間そのものが進歩しないこと、又人間が自己についての無知故に甚しい傲慢と偽善に転落して来たことの帰結であろう。原子科学は人間を脅し、国際間の政治的混乱は人間を不安に駆り立てる。自律性を喪失した現代人の多くは、安心して依存することの出来る思想的権威を求めて彷徨している。

Pascal の復興、Kierkegaard から Barth への弁証法神学、nihilism, existentialism, communism, それから Kafka, Sartre, Camus の文学作品などは皆20世紀的不安と危機の反映であるが、英国に於ては、この世紀の著しい反映を <Speculations>

に於て見る事が出来たのである。

又 Hulme の思想的立場はどこまでも英国経験論の上に立つている。世界観スケッチ “Cinders” に於て、経験論的多元論的不可知論的思考が明白に出ている。

“All is flux. ……there is no finite law encompassing all.” (p. 220)

“ The world is a plurality.” (p. 219)

“ Man is the measure of all things.” (p. 219)

“ No universal ego, but a few definite persons gradually built up.” (p. 225)

存在は chaos であり、多元的で intensive manifolds であつて、世界に於ける秩序は部分的で人間によつて作られたものであり、決して普遍的たり得ない。Hulme はその存在論と認識論に於て D. Scotus, W. Occam, F. Bacon, D. Hume 等の伝統につらなるものと云えよう。

“ It would be no exaggeration, I think, to assert that all English amateurs in philosophy are, as it were, racially empiric and nominalist; there is their hereditary endowment.” (p. 39)

Hulme はかかる英国的 empiricism, nominalism をおし進めることによつて、近世的な pantheism, フランス合理主義, ドイツ観念論, ロマン主義等に対抗することが出来たのである。Hulme の現代の不安の克服の方法としての tradition, organization, discipline とは如何なる限定を要するものであろうか。tradition とは近世を超えて中世, 古代に結びつくキリスト教の dogma, original sin にもとづく人間観であり, それは humanism や Hellenism に対するものであり, 又「進歩」の楽観にも抗するものである。organization, discipline は, 近代的な自由放任主義に対する control の考えである。これは一歩誤れば, 制度主義に墮す危険を包蔵するであろう。とにかく Hulme はかかる危険を有しながらも, 英国経験論から出発し, その relativism, pluralism, liberalism を一歩超えて, 宗教的倫理的領域に於て, 絶対的のものを認め, 又数理科学にも比せられる客観的な哲学, Husserl の “ wissenschaftliche Philosophie” や Moor の neo-realism を高く評価したのは, original な立場であつた。それは同心円をなす三つの不連続の領域の設定ともなつた。換言すれば, 英国本来の empiricism, nominalism が20世紀的な危機の姿に於て己を表現したのが Hulme の思想であり, sensibility であり, 芸術論でもあつた。

Hulme に於ける人間は, 如何なる時代に於ても, 不完全で罪を負っている弱小なる存在である。罪による神からの断絶, 人間の孤独さ, これは Hulme の根柢をなす思想であり実感である。このような場合, 人間の真の救済は, 神との和解にある。Hulme に於ける religion の中心たる神が, 如何なるものであつたかは明白でない。恐らくそれはむしろ旧約的な義と怒りの神であつた。それは Hebraism の神が, the Renaissance 以来人間化され, ロマン化され, 汎神論化され, 遂にはその他者としての超越性を喪失し, Eliot の所謂 strange gods に墮したことに對する激しい反省であり, 神への「畏れ」こそ原罪の意識とともに最初に要求されたものであつたからでもあろう。Hulme に於ける歴史的社会的考察の貧困は認めることが出来るであろうが, 彼の意図

は永遠の相の下に、世界の無常を直視しそこに有限存在としての人間の手によるささやかな秩序の世界を伝統の上にきづくことであつた。

Hulme の提出した方法が現代の矛盾と不安を克服するに足る充分のものではないとしても、近代ヨーロッパの矛盾を鋭く剔抉し、近代から現代への時代の転換を説き、現代の意識をば、原罪と生の不安に基礎づけ、人間と絶対者との間の不連続を露わにし、芸術に於ける無機的表現の意味づけを行つた彼の姿は、思想家として、又文芸批評家として、未完成ながら現代の悲劇を身をもつて体験し、これが克服に努力した予言的で知的な20世紀英国人の一つのタイプとして、英国批評文学史上にその位置を保つてあろう。近代の《hubris》こそ Hulme の批判の焦点であつたと云えよう。

Summary**Inquietude and Abstraction**

—The Situation of T.E. Hulme—

Katuo MOROZUMI

(Department of English Literature, Faculty of Liberal Arts and Science)

In this essay the author intends to sketch an aspect of the European mind and esthetics of the 20th century through a study of "Speculations" by T.E. Hulme.